

## 平成20（2008）年度発展途上国研究奨励賞の表彰について

アジア経済研究所は、昭和38年以来、発展途上諸国の経済などの諸問題に関する優秀論文の表彰を行ってきた。昭和55年には、「発展途上国研究奨励賞」として、この領域における研究水準の向上に一層資することを目指して、その対象を社会科学およびその周辺の調査研究事業の著作全般に拡大した。表彰の対象は、前年の1月から12月までの1年間にわが国で一般に入手できる形で公開された図書、雑誌論文、文献目録などで、発展途上国の経済、社会などの諸問題について研究し、また分析したものである。

平成20（2008）年度は各方面から推薦された39点を選考したが、最終選考で下記の作品が選ばれた。表彰式は7月1日に当研究所において行われた。

---

### 〈授賞作〉

『老いてゆくアジア』

（中央公論新社）

おおいずみ けいいちろう

大泉 啓一郎（（株）日本総合研究所調査部 環太平洋戦略研究センター主任研究員）

---

### 〈選考委員〉

委員長：寺西重郎（日本大学教授） 委員：絵所秀紀（法政大学教授），末廣昭（東京大学教授），中兼和津次（青山学院大学教授），協阪紀行（朝日新聞社論説委員），白石隆（アジア経済研究所長）

### 〈最終選考対象作品、著者名五十音順〉

最終選考の対象となった作品は授賞作のほか、次の3作品であった。

青山瑠妙著『現代中国の外交』

（慶應義塾大学出版会）

大野昭彦著『アジアにおける工場労働力の形成——労務管理と職務意識——』

（日本経済評論社）

柯 隆著『中国の不良債権問題』

（日本経済新聞出版社）

## ● 講 評 ●

大泉啓一郎『老いていくアジア』

てらにし じゅうろう  
寺西 重郎

少子高齢化と人口減少に直面している日本のアジアとのかかわりあい、アジア自体が近い将来同様の問題に向き合う可能性が高いことに着目して考察した力作である。第1章では、アジアの高成長の陰に忍び寄る人口高齢化の危機のあることを示す。第2章では、アジアでは、出生率の低下傾向の発生初期に生じる生産年齢人口の人口比率の上昇が、労働投入量の増加、教育水準の上昇と貯蓄率の増加をもたらし、総要素生産性上昇によらない高成長に帰結したことを、人口ボーナスという概念を用いて論じる。第3章では高齢化と生産年齢人口比の減少により、アジアの高成長は今後期待できないことを指摘する。ただし中国とASEANでは農村からの労働移動が都市の成長を可能にするが、その成長も農村人口の教育と生産性向上がなければ限界に直面するとされる。第4章では、人口構成の変化からアジアでは社会保障制度の整備に大きな困難のあること、蓄積の少ないアジアでは将来高齢者の生存危機の問題が生じる可能性

にあることを論じる。第5章では日本の経験を参考にした地域社会の再構築や生活の質を重視したライフスタイルの確立の必要性が説かれる。

新書版という形をとっているために、細かい論証（例——中国の戸籍制度の影響や教育の高度化と初等教育普及の関係など）に物足りなさを感じる面もあるが、アジアの高齢化を正面から取り上げ日本のアジアとのかかわりについて、着実な思考を積み上げており、着想とともに論理構成の組み立てがみごとである。特に、人口構成の動態と農村都市間の労働移動という視点からは、中国とタイなどのASEAN諸国を並行的に論じられるという発想は、独創的かつ説得的である。人口ボーナスの概念を、制度論などに依拠する既存の日本経済論やアジア成長論とどのように整合的に理解していくか、などさまざまなテーマが、今後の興味深い研究課題として新たに浮上してきたことも喜ばしい。

（日本大学教授）

●受賞のことば——おおいずみ 大泉 けいいちろう 啓一郎

この度、アジア経済研究所「発展途上国研究奨励賞」という名誉ある賞を賜りましたことは、大変うれしく、身の引き締まる思いです。

振り返れば、4年前タイの財政評価分析の一環として同国の人口構成を調べた際、合計特殊出生率が1.8と低く、高齢化率が7パーセント近いことに驚いて以来、所得が十分に高まらないうちに高齢社会に突入するということがどうか、長い時間をかけて起こる人口構成の変化を、東アジアの高成長や展望に引き付けて解釈すると何がみえてくるのか、東アジア共同体の形成に向けて少子高齢化をどう位置づけるのかなど、東アジアの人口構成の変化と経済社会への影響をずっと考えてきました。受賞した「老いてゆくアジア」は、その暫定的な到着点といえます。詰めなければならぬ点が多く、粗い枠組みにもかかわらず、評価していただいた審査員の先生方には心よりお礼申し上げます。

私は、高齢化自身は問題ではない、むしろ長寿は多くの人に共通する幸福のひとつの形態であり、東アジアはそれを実現したとのだと理解しています。また、高齢社会とは分別ある大人の多い社会であり、個々の自律と他人への思いやり、経験や知恵などによって豊かな社会を築く可能性を秘めるとも考えています。副題である「繁栄の構図が変わるとき」には、高齢化によって繁栄の味が「量」から「質」へと変わるのでという期待を込めました。

もちろん豊かな高齢社会の構築には相当の準備と覚悟が必要になります。東アジア全体で高齢社会について真剣な議論と協力が深まる、そ

んな状況が生まれれば、東アジア共同体形成に向けて大きな前進だ、そんなことも考えます。

今後とも研究に加えて、東アジアの現場で、そしてご近所で、豊かな高齢社会造りに関わり続けたいと強く思っています。

#### 略歴

1963年 大阪生まれ  
1986年 京都府立大学農学部卒業  
1988年 京都大学大学院農学研究科修士課程修了  
1988年 東レ・ダウコーニング株式会社勤務  
1989年 京都大学東南アジア研究センター研修生  
1990年 (株)三井銀総合研究所勤務  
現在 (株)日本総合研究所 調査部 環太平洋戦略研究センター主任研究員、  
法政大学経済学部非常勤講師、JICA社会保障課題別支援委員会委員

#### 主要著作

(共著)

新田目夏実・大泉啓一郎・梶原弘和『開発途上国の高齢化を見据えて——新しい支援・協力への視座——』国際協力総合研修所、2006年 (Facing up to the Problem of Population Aging in Developing Countries: New perspectives for Assistance and Cooperation, Institute for International Cooperation, 2006)。

(単著)

『老いてゆくアジア』中公新書、中央公論新社 2007年。

(その他)

「社会福祉制度改革——国家介入なき福祉戦略」  
玉田芳史・船津鶴代編『タイ政治・行政の変革 1991-2006年』アジア経済研究所 2008年。

「東アジア少子高齢化時代と日本の協力」渡辺利夫編『日本の東アジア戦略』東洋経済新報社 2005年。